

MORIOKA YMCA NEWS

盛岡YMCAの使命

私たち、盛岡YMCAは、イエス・キリストによって示された生き方に学びつつ、豊かな自然と歴史的伝統に満ちた岩手の地で、こども、家族、地域とともに公正で平和な世界の実現を目指します。

1. こどもたちの個性を大切に、それぞれの夢や希望、生きる力を育みます。
2. 家族の絆といのちの大切さを深め合います。
3. 共に生きるために、異なった文化、多様な価値観と出会う場を提供します。

4月号 YMCA宮古災害ボランティアセンター開設



編集発行人： 濱塚有史 発行所： 特定非営利活動法人 盛岡YMCA 岩手県盛岡市本町通3-1-1
TEL 019 (623) 1575 e-mail: morioka@ymcajapan.org URL: <http://www.ymcajapan.org/morioka/>

「大災害支援に向けた盛岡YMCAの取り組みについて」

盛岡YMCA 理事長 石渡隆司

初めに、さる3月の11日に東北・関東地方の太平洋沿岸を広く襲った大地震と、それに続く大津波により、岩手県内では沿岸部を中心に大きな被害がありました。この間、盛岡YMCAの関係者の皆様が無事でおられることを願ってまいりました。ご家族やご親族などの近親者でお亡くなりになられたり、行方不明になられたり、さまざまな形で被災された方々もおられることと存じ、それらの皆様に対して、盛岡YMCAを代表して心から弔意とお見舞いを申し上げます。

災害の直後の2日間は、電力を始め、大半のライフラインがストップしていましたが、沿岸の被害状況もよくつかめずにはおりましたが、後にテレビ画面を通して沿岸地区の惨状が伝えられてからは、改めて事態の深刻さを実感し、被災地に近くYMCAとして何が出来るかを考え始めました。早速14日には、濱塚所長と電話で盛岡YMCAの使命に照らし、県内の被災者に対する支援活動について基本方針を決定しました。

もちろん、小さな組織体である盛岡YMCAにできることは限られていますが、岩手県の社会福祉協議会、さらには参加が見込まれる多くのボランティア団体との調整のうえ、被災地の状況やニーズを調べ、当面の活動と長期にわたる支援の両面から、独自の役割を果たせるように考えようということになりました。

今回の巨大な自然災害は、自然の力の前で個々の人間がいかに無力であ

るかを悟らせたと同時に、人々の善意の連帯がいかに大きな力を発揮し、関係者に生きる勇気を与えるかを教えられた出来事でもありました。

私どもの活動がいくらかでも被災地のニーズに応えることが出来るために、全国のYMCAの協力を仰ぐとともに、神戸のYMCAが阪神淡路大震災でボランティア活動全体を束ねるような指導的な役割を果たしたように、他のボランティア組織とも協同しあいながら、息の長い支援活動として取り組んでいくつもりです。そのなかでもYMCA運動の多くの経験から、とくに被災した子供たちの心理的ケアについて一定の役割を果たすことが出来ればと考えております。

すでに、宮古の教会という活動の足場も得られ、北海道YMCAからの人的支援、タイやスリランカなど海外の津波の被災地で救援ボランティアとして経験を積んできた、盛岡YMCAリーダーのOBで県大出身の大塚君の参加など、まことに頼もしい援軍もありますので、今後は逐次その役割を明確にしていけるものと期待しております。

従いまして、盛岡YMCAの活動は、これまでのスポーツや学習などのプログラムとともに、「子供たちの自立の支援と連帯の喜びを育てる」ことに重点を置いたものにしていければと考えております。

会員の皆様にもどうか、これらの活動にご理解とご声援を賜りますようお願い申し上げます。

YMCA宮古ボランティアセンターが開設されました。

盛岡YMCAは、日本基督教団宮古教会のご協力で3月18日より、スタッフ、ボランティアが現地に入り、その後、全国YMCAの支援のもと、YMCA宮古ボランティアセンターを開設し、地域の復興支援の活動を開始しています。地域の被災した家屋の掃除のお手伝いをしたり、避難所をまわり、その様子を社会福祉協議会に連絡したり、関係諸団体と連携しながら活動を行い現在にいたっています。4月10現在、YMCAの派遣する第3次ボランティアグループが現地で活動しています、盛岡YMCAは、今後も継続してこのセンターを中心に支援を行っていく予定です。以下、先遣隊として現地に入った伊藤眞太郎ディレクターからの報告です。

3月21日（月）

東日本大震災から11日目、海岸線ではいまだに家が二重、三重に重なり、車や船がそこら中に転がっている。宮古市からの放送では、道路に出ている家のゴミ、瓦礫を撤去する案内が毎日放送されているが、なかなか進んでいない。電気や水道が通っていない地域も少なくない。ヘドロが乾き、砂塵が舞っている。

避難所で暮らす人たちの1日は、朝起きて避難所で与えられた役割をこなした後、半壊した自分の家の片付けへと出かける。しかし、大半の方々は老人でタンスや泥まみれの布団や畳などが運べず、作業が進んでいない。現地ボランティアは主に地元の高校生が手伝ってくれているが圧倒的に人手がたりない。



3月22日（火）



今日は、宮古小の避難所で出会ったMさん宅の片付け作業を手伝った。Mさんは、一人暮らしで、家の被害を見て希望を失い、家の前でじっと家を見つめるだけだったり、避難所の中で1日中過ごしていたりしていたと言う。しかし、一緒に作業をし、少しずつ家の中が片付いていく中で、少しの笑顔が

戻ってきた。



上の写真は宮古市の重茂半島、赤前地区の写真。上記の写真のように、残っている家屋には自衛隊が入り安否確認を行い、「済・〇・×」のサインを示してから重機による撤去作業が行われているため、なかなか作業が進まないのが現状。

3月23日（水）

本日より、横浜YMCAから2名、日本YMCA同盟からの派遣で山の会からハイパーボランティアの方々3名が合流。被災された方々の状況は、刻々と変化している。希望を見出したり、生きる力が湧いてきたり、しかしまた諦めたり、無力感に押しつぶされそうになったり、抱えこんでしまったり。

被災された方が言っていた。津波から生き残るための鉄則が沿岸地域にはある。それは、家族や親戚、財布や通帳などと一緒に逃げず、とにかく自分の命を守ること、今回の津波でも生き残った方や、残った船は、この鉄則を守れた方が多いと聞く、船や家族の心配もあるが、鉄則を守り、沖へ全速力で逃げた船。陸の人は家族を探す、助けに行く前に自分の命を守った方。逆に戻った方々のほとんどは逃げ遅れ波にのまれてしまったと言う。なんて、悲しく、つらい鉄則だろう。被災し、非難している方々は、私たちが想像もつかない苦しみをひとりひとりが抱えている。だからこそそのひとりひとりの心に私たちが寄り添うことが必要だ。人は一人では生きていけない、寄り添い、励ましあって生きていくもの。そうすれば、この地震・津波もい



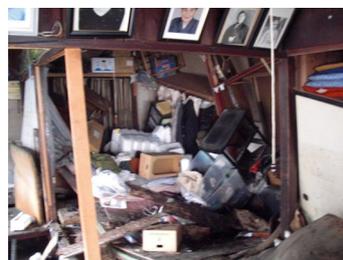
つかは乗り越えられるだろう。

3月24日（木）

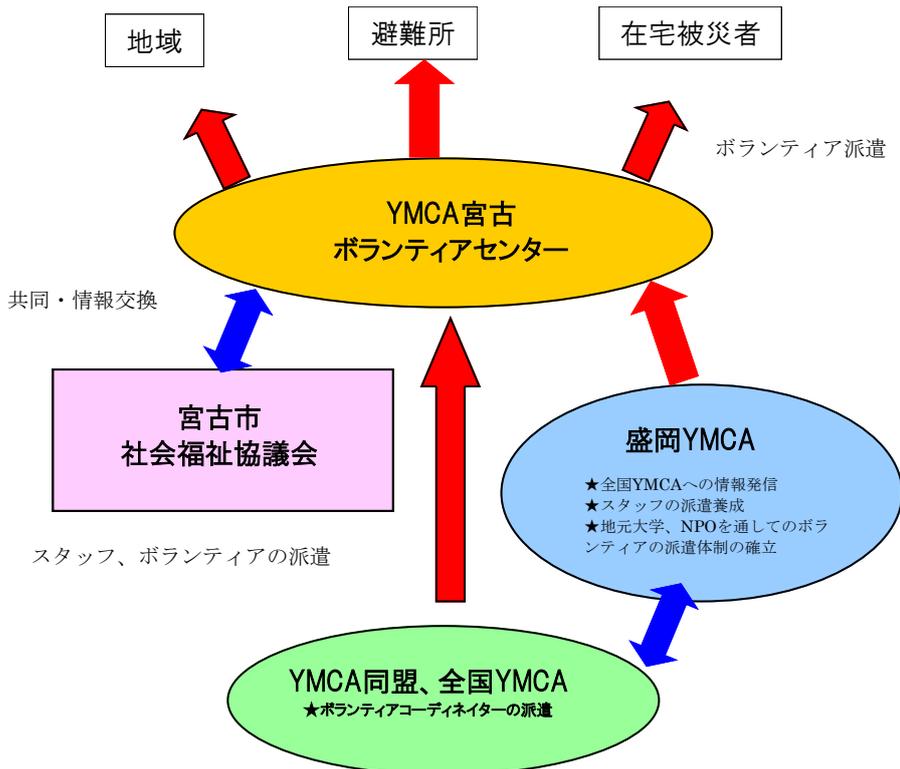
新たに作業をする場が確実に広がっている。Mさん宅での作業中に更に2件のお宅から撤去を手伝ってほしいと要望を受けた、今後も支援できるエリアを広げ、ひとりでも多くの被災者に寄り添うことで、力となり、希望や勇気を与えることができたと思う。人数が増えたことで、様々なことが1日のできるようになったことはとても大きな意味がある。

今日は各避難所を回ることができた。県内の先生がたがボランティアで入っている所も多く、4月からその先生たちがいなくなった後のボランティア不足が懸念されている。

宮古教会の隣の家屋の様子。お年寄りが住んでいたため、一人では作業ができなく、私たちのようなボランティアが協力している。（左下）の写真の片付けた後の写真。床が海水に浸かり腐って抜けてしまった。



YMCA宮古災害ボランティアセンター
初期活動の形態(第1次フェイズ)



YMCAの救援・復興活動の特色は、当該地域における多岐にわたるYMCAプログラムの実績により、参加者、保護者、地域の方々から厚い信頼の積み重ねで、すぐに心と心をつなぐ活動ができること。地域行政・学校・キリスト教会などのネットワークを存分に活かしてその地域のニーズに沿った活動を展開できることです。今回の震災におきましても、特に子ども、お年寄り、外国人の方々にも注力しながら、被災のストレスを軽減し、生きる元気を取り戻していただけるよう現地のニーズにあった活動を長期的に実施してまいります。状況によって変化しますが、おおよそ下記のような段階で活動を行う予定です。

- ★ 第1次フェイズ 先遣隊派遣、緊急物資の配送・配給、ボランティア拠点等の立ち上げ、他団体との連絡調整・情報収集（即日～2週間程度）
- ★ 第2次フェイズ 計画的なスタッフ派遣、ニーズ聞き取り等（1ヶ月）安全の確保や現地受け入れ状況が整えば、ボランティア組織（受け入れ/派遣）
- ★ 第3次フェイズ 心のケア、トラウマカウンセリング、中、長期的な自立支援等

宮古レポート①

アドベンチャークラブの会員、千葉優ちゃんは、昨年盛岡の小学校から宮古の藤原小学校に転校しましたが、その後もはるばる宮古からYMCAの活動に参加してくれていました。

18日、宮古に着くと千葉優ちゃんの安否を確認するため避難所を回りました。優ちゃんが住んでいる地区も被害がひどく、信号機はついてなく、道路にはそれぞれの家から出された瓦礫の山が続いていました。避難所を4か所回ったところようやく優ちゃんを見つけられました。通っている藤原小学校よりも高台にある避難所にいました。3月末に予定していた2泊3日のキャンプに参加予定で、キャンプの中止を伝えると残念そうな顔をしていました。無事に会えて、震災後もキャンプを楽しみにしてくれていたこと、嬉しかったです！また、キャンプで会いましょう！



東日本大震災YMCA
救援復興基金のお願い

今後、被災地への支援は、長期的に行われていきます。リアス式海岸の入り江ごとに点在する被災地の復興は、今までの震災に比べ、さらなる困難と長期化が予想されます。

盛岡YMCAは、全国のYMCAの支援を受け、長期的な支援を宮古をベースに行っていく予定です。皆様のご協力をお願い申し上げます。

●救援・復興基金は、次のいずれかの方法でご納入いただけます。

- ① 郵便振替（同封の振込用紙をご利用下さい。）
- ② 銀行振込み（下記口座にお振込み下さい）
北日本銀行本店 普通預金
口座番号：7029115
名義：盛岡YMCA東日本大震災被災地支援口
理事長 石渡隆司

感謝（順不同、敬称略）

- ★ご協力有難うございます
- 東日本大震災救援・復興基金
- 花田暁、勝又文子、伊藤真一郎



あの頃君は～ ♪若かった～♪⑥

ベムリーダーの巻



盛岡YMCAリーダーの尾木義彰（ベム）です。僕は宮城県利府町出身で、1988年9月18日に生まれました。

小さい頃の僕は工作が大好きで、暇さえあれば工作をしたり、次にどんな工作をしようかイメージを膨らませていました。作品は見た目ではどうやって遊ぶのか分からないようなものばかりでしたが、僕にとっては全部が最高傑作でした。友達と山の中に秘密基地を作ったときなんか、他のみんなが部屋を作っている中僕はいかに人目につかない基地にするか工夫したり、部屋に敷く絨毯作りをしたり、男子・女子トイレを作ったりと、とにかく自分好みの工作を人知れず楽しむような子どもでした(´_`)

僕はすごく人見知りで、人と話すのがとても苦手な子でした。だからこそ僕にとって、遊びは言葉以上にみんなと仲良くなれる大事なコミュニケーションの手段だったように思います。一人で工作も好きでしたがやはり友達と遊ぶのも好きで、よくサッカーや野球もやりました。あまりにもピッチングの球速が遅すぎてボールがフォークのように落ちるため「大魔神尾木」と呼ばれていたあの頃が懐かしい…。



そんな僕も今年の春から社会人になります。福島県いわき市ということで、福祉関係の仕事に携わります。いわき市は先日の地震で大変な被害を受けた地域です。僕にできること、僕にしかできないことはたくさんあると思うので、今自分が何をすべきなのかをしっかりと考えて行動したいと思います！

岩手県立大学 社会福祉学部卒業
今年4月より 福島県郡山市社会福祉協議会に勤務

リーダーお勧めの本 やんくみリーダー

ライオンと魔女

C.S.ルイス 作 瀬田貞二 訳
ポーリン・ペインズ さし絵



みなさん、大震災がありましたが大丈夫でしょうか？わたしは幸い大きな被害もなく無事でした。ガソリンや食品、電力などたくさんのもが不足していますが、1日も早い復興のために元気出していきましょう！そしてそんな毎日の息抜きに読書などいかがでしょうか？

——とある四兄妹が疎開先のお屋敷で見つけた大きな衣装箱の奥には、魔法の国が広がっていました。白い魔女によってずっと冬にされているナルニアを、4人は言い伝え通りに救うことができるのでしょうか…。先日シリーズ3作目となる映画「アスラン王と魔法の島」が公開された「ナルニア国ものがたり」の中で、いちばん最初に発表されたお話がこの「ライオンと魔女」です。さし絵が少なく

文章もややまわりくどい難しい言葉が多く使われていますが、それを乗り越えると素晴らしい魔法の世界が広がっています！しゃべる動物たちに木の精や泉の精、フォーンやセントール、一角獣や巨人などの想像上の生き物がたくさん出てきます。さらにこのナルニアには本物のサンタさんがいて、クリスマス（白い魔女の支配の下ではずっと訪れていませんでした）にプレゼントをくれるのです！そのほかにもあらゆるところに魔法がちりばめられていて、ドキドキワクワクすること間違いなしです！

映画は観たけれど・・・という方も多いかと思いますが、ぜひぜひ文字と少しの挿絵から想像を膨らませてナルニアの世界を楽しんでほしいです！実は、ナルニアの歴史としてはこのお話の前にナルニアの創世のお話がありますが、やはり発表された順番に読んでいくのが面白いと思います（詳しくは巻末の訳者あとがきに書いてあります）。魔法の国への入り口として、皆さんもルーシたちと一緒にナルニアへ冒険をしに行きませんか？



こぼれ種⑥

「行ってあなたも同じようにしなさい」

日本基督教団 内丸教会牧師 (元日本YMCA同盟 主事)
中原真澄



3月11日に起きた大地震と津波は、私たちが当たり前と思っていた様々な事柄が決してそうではない…自然の前では人はどれ程に小さく、僅かな者か…まぎまぎと見せつけられました。千年に一度という未曾有の災害は、私たちから身近な人々を奪い、更に多くの人々から日常をはず取り、私たちは未だ、その悲しさと苦しみを測ることは出来ません。

そんな中、盛岡YMCAが震災翌週にはスタッフとボランティア・リーダーを現地に派遣し、被災した方々の支援に携わっていると知り、「いかにも…」と嬉しく、また誇りを覚えたことでした。YMCAはその当初から「青年のいる所、YMCAあり」と、戦争や被害に出遭った人々の所へ赴くことを当然として歩いて来ました。私の父も学生時代、関東大震災に出遭い、学生YMCAの一員として、学業を置いて長く、被災した子ども達のための活動に専念したと聞きました。日本のYMCAも早くから、国の内外を問わず、災害を悩む人々の許へ出かけ、共に労し、共に食し、共に悲しみ、共に笑うことをその大切な働きとしてきたのです。

これからも長く、被災した方々の苦勞とたたかいの日々は続くでしょう。そのために全国からYMCAの仲間たちが駆け付け、共に労を担っています。また世界からも、同じYMCA仲間の手が差し伸べられています。昔、イエスが「私の隣人とは誰のことですか」と聞かれた時、有名な「善いサマリア人」の譬えを話されました。(ルカによる福音書10章)。イエスは「誰が私たちの隣人か」ではなく、「私たちは誰の隣人となるのか」を問い返されたのです。YMCAは、この問いを常に念頭に置きながら、これまで歩いてきました。これからもまた、そのように歩む一人ひとりとして、共に歩いていきたい…そう、心から願っています。

「さて、あなたはこの3人の中で、誰が追いはげに襲われた人の隣人になったと思うか」。律法の専門家は言った。「その人を助けた人です」。そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

(ルカによる福音書10章36節37節)

～表紙の写真から～



3月18日に宮古現地に入り、お年寄りの方が一人でも家の前でどうしているかわからずに困っている、避難所でこれからどう生きていけばいいかわからず寝込んでいる。そんな被災者の方たちと出会い、できることを精一杯やってきました。瓦礫の撤去作業では、ヘドロまみれでタンクや食器棚も倒れている家の中に入り、被災者の方と必要なものと必要でないものを分けながら片づけをしていきました。たくさん思い出が詰まった家に土足で入り、ほとんど物を捨てていく、そんな作業が続きました。文字通り、土足で他人が家に入り、家の中のものを捨てていく。被災者の方はどんな気持ちなのだろう？考えれば考えるほど、胸が苦しくなりました。けれど笑顔忘れず、心と心で会話をし、ひとりひとりの方たちと信頼関係を結んでいきました。避難所でも同じです。ボランティアの方が入っていない避難所がほとんどで、家族や家を失った被災者の方たち自身で避難所をやりくりしていました。心身ともに疲れていて、ストレスもたまってきた状態の避難所がほとんどでした。そんな方たちに「がんばってください」なんてとても言えません。上記のメンバーは、そんな活動を共にしたそれぞれの強い意志で宮古に集まった仲間です。被災者一人ひとりの苦しみを自分のことのように受け止めて、被災者の方たちとつながっていきました。まだまだ、宮古をはじめ沿岸地域の復興・復興には長い時間がかかると思いますが、このような時だからこそ出会いを大切に、手とりあつていく必要があると感じました。日常が非日常に変わってしまった。できるだけ早く日常に戻れるようにできることを今後もやっていきたいと思っています。

盛岡YMCA スタッフ伊藤 真太郎